

(国分市上之段水ヶ迫他)

位置と環境

遺跡は北側に傾斜した上野原台地の南側縁辺部にあたる、標高約 260mの地点にある。上野原台地は裾部が鹿児島湾岸に迫る独立したシラス台地で、輝石安山岩を基盤とする。そのため岩盤との境から水が湧き、その地点は台地の中腹部をめぐるように点在しており、水の便は良かったようである。

調査の経緯

国分・上野原テクノパーク造成工事に伴って、平成3年(1991)から平成6年にかけて県教育委員会が発掘調査した。また平成10年6月30日には、767点の遺物が、国の重要文化財として指定された。

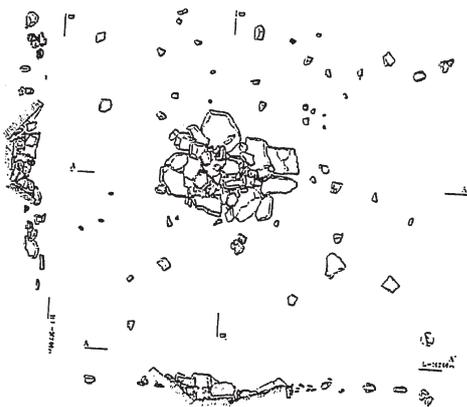
遺構と遺物

縄文時代から中世まで連綿と続く複合遺跡で、約90,000㎡の調査範囲に約15万点の遺物が出土した。そのうち、主体となるのは縄文時代早期後半である。

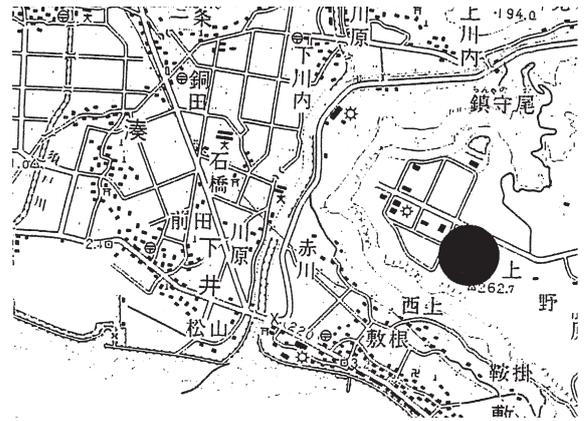
縄文時代早期後半の遺構は252基の集石遺構と、対で埋められた壺形土器を含む、11基の土器埋納遺構と、6基の石斧埋納遺構などが検出された。

集石遺構は、直径約80~100cmの大きさがあり、こぶし大から人の頭ぐらいの石が100個ほど集まっていたものが多い。なかには平たい石を敷きつめた遺構もあり、施設として作られていたようである。

これらの石の多くは熱でくだけ、なかには黒い脂の固まりがついていたことから、石蒸し料理をしたあとだと考えられている。

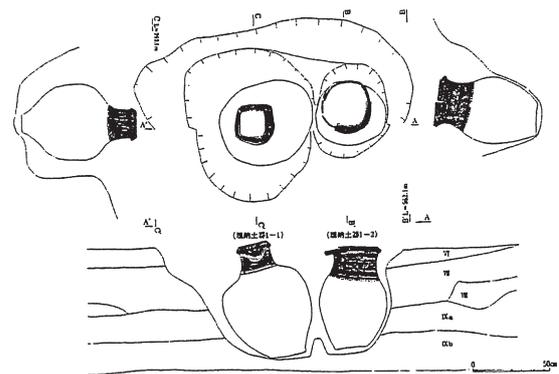


第2図 集石遺構

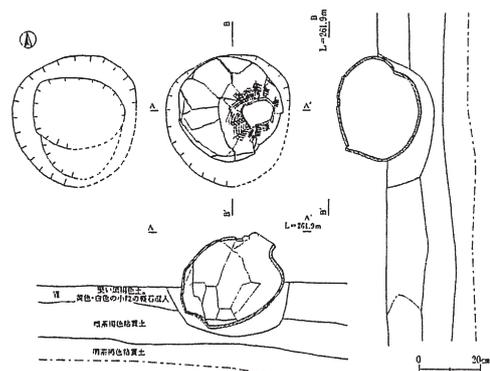


第1図 上野原遺跡第10地点の位置

土器埋納遺構には壺形土器や鉢形土器が埋められていた。台地の最も高い所に完全な形でみつかった対で埋められた壺形土器は、土器が倒れるのを防ぐためか、大きな穴の中に更に小さな穴が2つ掘られ、土器はそれぞれ立てて入れられていた。他の埋納遺構の土器はいずれも単体で、ななめや横に置かれた状態で検出された。土器中の土壌からは、遺体埋納や貯蔵物の存在を積極的に示す結果は得られなかった。そして、11基の土器埋納遺構の周囲からは、一



対で埋められた壺型土器

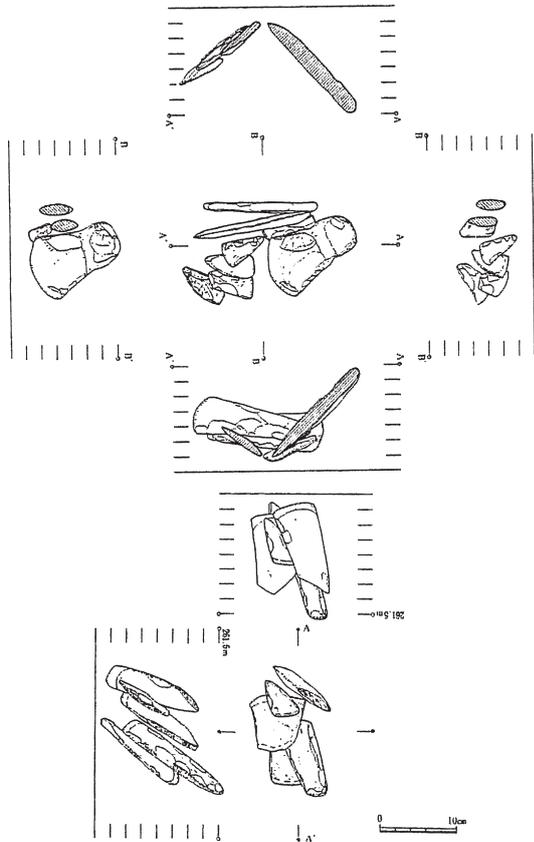


第3図 土器埋納遺構

般の遺物の出土がほとんど見られないことから、この場所で祭祀が行われたと考えられている。

石斧埋納遺構には、2本から8本の石斧がまとめて埋められており、全部で6か所見つけた。これらの石斧の多くが、側縁部や刃部を上下にして出土したことや、研ぎ直されてから埋められていることから、祭祀に使用された可能性が考えられている。

また、土器埋納遺構などを取り囲むように、日常



第4図 石斧埋納遺構

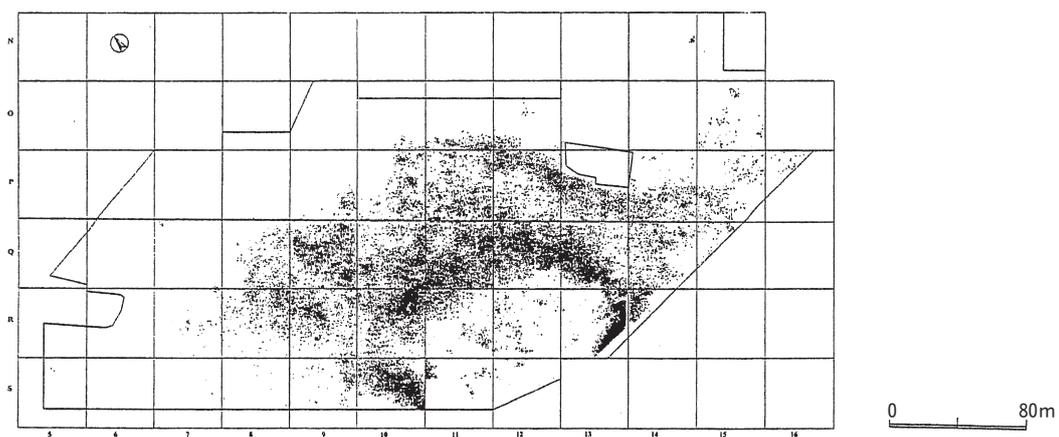
使われていたおびただしい量の土器や石器などが、環状に出土した。その中には、100m以上も離れていながらも接合する土器が数多くあったことから、人びとがこの場で土器を割ったあと、まわりにその破片を置いたらしい様子がうかがえる。

縄文時代早期の土器には、早期中頃の下剝峯式土器や押型文土器、早期後半の妙見式土器、平楯式土器、塞ノ神A・B式や苦浜式土器などがある。特に、第10地点で出土した土器の中心となる平楯式土器には、深鉢形土器と壺形土器があり、深鉢形土器には口径が50cmを越える大型の土器から、10cm未満の小型の土器まで、大きさの違いでは6種類ある。

また壺形土器には、口の部分が筒状をし胴部が大



第6図 縄文時代早期後半出土遺物（土器）



第5図 環状遺棄遺構

大きく張る形の土器と、口の部分から胴の部分までで肩状に張る形の土器とが2種類ある。これらの壺形土器を観察すると、口や胴の部分にススがつき、底部付近の表面がただれていることから、壺形土器は火にかけられていたようである。

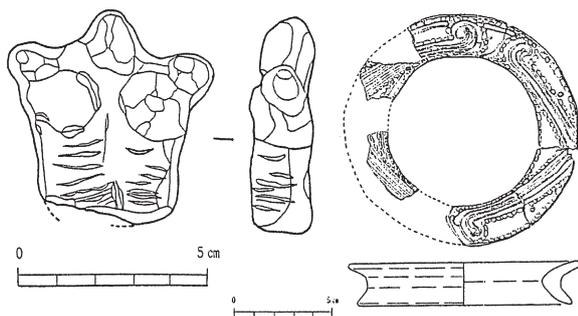
土製品には、土偶、耳飾りやパレットのような形をした異形土製品などがある。土偶は人をかたどった土製品で、頭と両腕を簡略化し、乳房を小突起、肋骨を細い線で表現した女性像で、九州最古である。土製耳飾りはピアスのように耳たぶに穴をあけてつけるもので、滑車形と臼形とがある。直径が約12cmを測る大きいものもある。渦巻き文などの文様が施されたものと無文のものがある。多くの耳飾りにはベンガラという赤色の顔料や、赤色に発色する土が塗られていたようである。異形土製品は三角形や分銅形などをしており、全国的に出土例が少なく、使い道がはっきりしない。

石器は、磨製石斧・打製石斧・環状石斧・環石・石匙・石槍・石鏃・搔器・彫器・削器・石錐・筧状石器・楔形石器・石鋸・礫器・異形石器・磨石・敲石・石皿など、多くの器種があるのが特徴である。

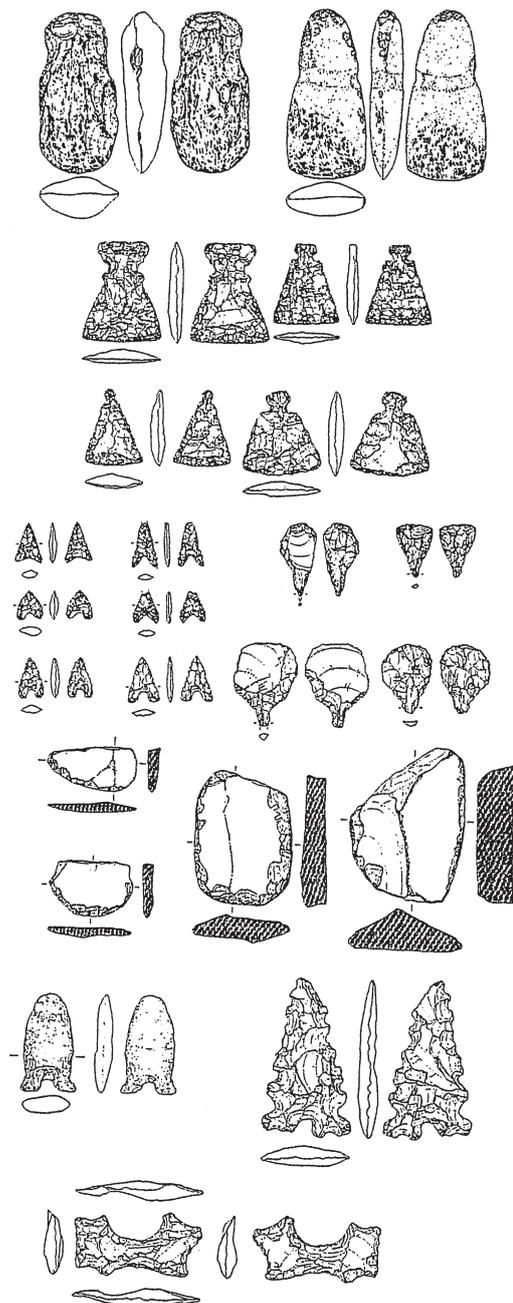
また、磨製・打製石斧、石匙、石鏃、礫器などは、形や大きさの種類が非常に豊富で、対象物などの用途に応じて使い分けていたと考えられる。特に小型ノミ状石斧は、当時の南九州において、ある程度の木工技術が進んでいたことを示している。

剥片石器のうち、石鏃・石匙などの定形石器とは全く異なる形態をしている異形石器は、様々な形態があることや、体部に摩耗痕のある個体があることから、祭祀の中で用いられていたと考えられる。

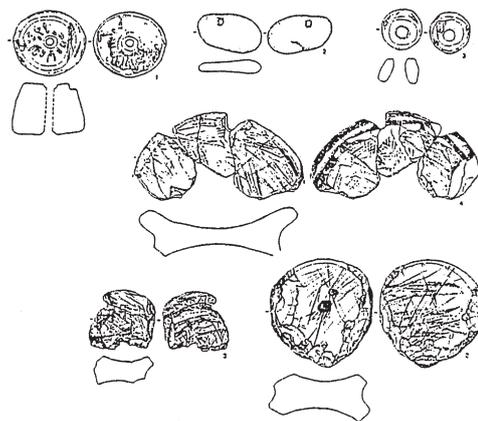
石製品には、垂飾、耳飾りなどがある。



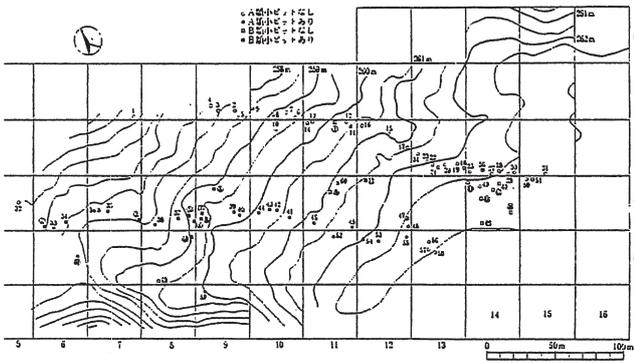
第7図 縄文時代早期後半出土遺物（土製品）



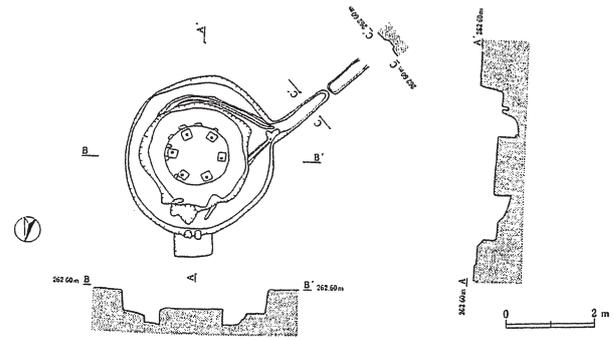
第8図 縄文時代早期後半出土遺物（石器）



第9図 縄文時代早期後半出土遺物（石製品）



第10図 落とし穴列検出状況



第12図 近現代検出遺構

垂飾は、紐通し用と考えられる穿孔がある、小さな礫を用い、3点出土した。耳飾りは土製のものと同一白形に加工された石製品である。凝灰岩や軽石など加工のしやすい柔らかい石材で作られている。

軽石製品には、外面を整形しているもの、貫通しない穴を掘っているもの、貫通した穴を空けたものなどがある。これらの用途は不明である。

本遺跡でさらに注目されるのは、縄文時代後期の時期に属すると考えられる、落とし穴列が約400mにわたり、東西方向に2列並んで検出されたことである。南側列の落とし穴は深さが約1.8mあり、穴の底には逆茂木を立てたと考えられるピットがみつかった。また、北側列の落とし穴は深さが約2.8mあり、

穴の底のピットはみつからなかった。

また中世の時期としては、台地南東部の西向きのゆるやかな斜面に、掘立柱建物跡が8棟検出された。2棟から3棟が1群をなして、ある期間続けて生活をしてきたと考えられている。

さらに近・現代の時期としては、台地南側の斜面への落ちぎわに、第2次世界大戦中の探照灯跡とケーブルなどが発見され、軍事施設の存在がわかった。また戦後には台地全面に畑がつくられ、畑の区画ぎわではサツマイモを保存する穴が掘られていた。

特徴

縄文時代早期後半を主体とする遺跡であるが、長期にわたって生活している。

縄文時代早期後半においては、特殊な遺構や遺物が数多く発見されたことから、祭祀が行われていたと考えられている。

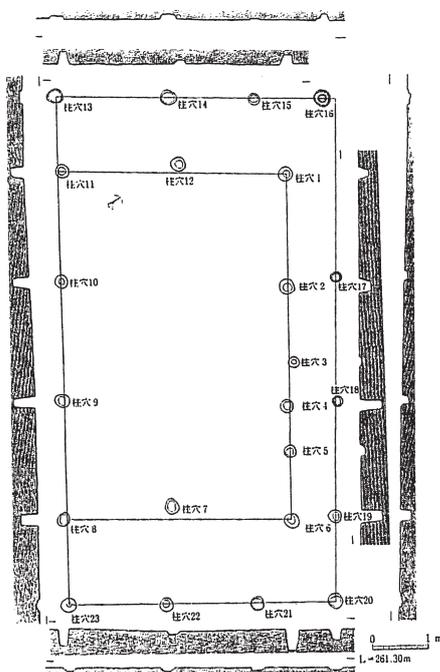
資料の所在

出土遺物は、鹿児島県立埋蔵文化財センターに保管されている。また、重要文化財に指定された遺物は上野原縄文の森展示館に展示されている。

参考文献

- 鹿児島県立埋蔵文化財センター2000「上野原遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』27
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター2001「上野原遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』28

(八木澤一郎)



第11図 中世掘立柱建物跡検出状況